

KGK BOOKLET

ボビー・スン
学生と教会



the Student
§
His Church

Bobby E. K. Sng

Copyright ©1984 Singapore FES

Bobby E. K. Sng
ボビー・スン

“The Student and his Church” - 『学生と教会』 is translated from the original edition in English (1984), and reprinted by permission of Fellowship of Evangelical Students (Singapore).

学生と教会

「あなたはペトロ。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てる。」(マタイ16:18)

Simon Peter answered, "You are the Messiah, the Son of the living God."

Matt. 16:16

「一人のクリスチャンが神の民の中で、その一端を担うとはどのようなことかを理解し始めたことを表す一つのしるしは、どこにいても自分自身を他の信徒たちと同じ仲間だと認識しようとするときである。」

何年か前の大会で、わたしはある学生と出会いました。彼がクリスチャンになったことは多くの人に強い印象を与えていたのですが、私とその学生と出会った時、彼はキャンパスでの学生伝道を手伝っていました。わたしは彼に「もう洗礼を受けているのですか？」と聞いたのですが、彼は驚いて「それって、本当に大事なことなんですか？」と言いました。そこでわたしは続けてもう一つ尋ねたのでした。「でも君はクリスチャンになって5年になるじゃないか。地域教会に加わっていないのかい？」すると、彼はこのように答えました「いえ、別に。ぼくはこのことについてはそんなに急いではいないので。」

この出来事は、学生が教会に関して持ちがちな誤解を浮き彫りにしていますが、その誤解はクリスチャン生活の個人主義的な理解から来ているものと言えます。キリ

「…あなたはペトロ。
わたしはこの岩の上に
わたしの教会を建て
る。」(マタイ16:18)

スト教個人主義はこのように言います。「わたしはキリストを
救い主として受け入れました。デボーションも守っているし、
学校でもしっかりした主の証し人であろうとしている。それで
充分じゃないの？」このような状況は、クリスチャンの使命の
解釈を狭めて「わたしたちの地上での人生は、福音を宣べ伝え
回心者を起こすことが全てである」という印象を与えているク
リスチャンの団体があるという悲しい事実によってさらに悪く
なっています。教会を建て上げるということは彼らの考えの中
にはあまりありません。そのような見方は教会の本質と、その
中のクリスチャンの場所を真剣に考えることができなくしてい
ます。

召された民

※エクレーシアー

原語である「エクレーシア
ー」そのものには「呼び出さ
れた」という意味よりも一般
的な意味での「集会」の意味
が強く、むしろ「エクレーシ
アー」の語源となっている

「エッカレオー」に「呼び出
された」という意味が見いだ
される。「ギリシャ語のエク
レーシアーは語源的にエッカ
レオーに由来し、原義は「呼
び出された者たち」という意
味から、普通「集会」を意味
しました。新約聖書では、神
学的考察から「世から呼び出
された者たち」という意味に
発展したと言えるでしょ
う。」(伊藤明生師による)

教会とは何でしょうか？クリスチャンが日曜日に礼拝のため
に行く宗教的な建物でしょうか？ある特定の教派—メソジスト
教会、ルーテル教会、あるいはローマ・カトリック教会のこと
でしょうか？意外かもしれませんが、教会とは何かを考える際
には、上記のような定義で考えられるのではなく、聖書記者た
ちの考えた教会の定義に立ち戻る以外にありません。

「教会」という言葉はギリシャ語の「エクレーシアー」(※
左脚注参照)という語から訳されており、「召された(呼び出
された)民」という意味を持っています。例えば、使徒の働き
19:32、39、41にはこの言葉が「集会」「議会」「集まり」と
訳されています。これはエフェソの人々が公の事柄について決

「わたしはあなたを大いなる国民にしあなたを祝福」する。(創世記12:2)

めるため呼び出されたということで、当時は一般的なことでした。教会とはすなわち、人々のことなのです。

教会は神様によって召された人々を指します。イエス様ご自身がこの用語を使った最初の人です。例えばペトロが、イエス様が何者かを告白したとき、主は彼に「…あなたはペトロ。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てる。」(マタイ16:18)と言われました。主が考えておられた教会は、神様によって召された民となることでした。召された人たちは罪を悔い改めキリストに信頼を置いたという、共通の経験を分かち合います。また、彼らは主に仕えたいという共通の願いによって互いに結び合わされます。

旧約聖書

神様によって召された民という考え方は、旧約聖書にまでさかのぼります。例えば、神様がアブラハムに故郷を離れカナンに移住するように言われたとき、神様はただ数人の人たちの将来を考えていたわけではありませんでした。神様はアブラハムから一つの共同体を造ろうとされていたのです。「わたしはあなたを大いなる国民にし／あなたを祝福」する(創世記12:2)。この共同体は非常に大きくなるだろう、天の星のように数え切れなくなるだろう、と。

数百年後、この共同体が非常に大きくなった後で、モーセがこの民をエジプトから導き出しました。この出エジプトの出来

「良い実を結ばない木
はみな、切り倒されて
火に投げ込まれる。」
(マタイ3:9-10)

事を、ホセアという預言者が神の民の召しと見ていることは興味深いことです。「まだ幼かったイスラエルをわたしは愛した。エジプトから彼を呼び出し、わが子とした。(ホセア11:1)」ある意味で、イスラエルが「教会」あるいは召された民であったと行うことができるでしょう。「イスラエルの全会衆」(ギリシャ語でエクレシアと訳されている言葉)は旧約聖書に70回も使われています。

イスラエルの悲劇は、神の民としての役割を充分果たすことができなかったという点にあります。まず、彼らは信仰において妥協をしてしまいました。イスラエルは地の果てにまで神様の救いを宣言することをせず(イザヤ49:6)、その代わりにイスラエルは偶像礼拝を行いほかの民族となんら変わらない人々となってしまいました。次に、イスラエルはその共同体の霊的な本質を忘れてしまいました。つまり彼らは、共同体の一員になる事が、ただアブラハムの血縁による子孫である以上のものだとすることを忘れていたのです—イスラエルは主に従うという献身のために召されていたにもかかわらず、です(出24:3)。イスラエルは、神の民としての地位は生まれながらに与えられていて、かつ民族的な背景に基づいていると考え、傲慢になっていきました。神様の裁きが下り、人々が捕囚に連れて行かれたとき、なぜ神様がこのようなことが彼らに起こることをお許しになったのか理解できない人が沢山いましたが、それも当然のことです。

イスラエルに公正を期すならば、その暗い時期においてさえも、一握りの神様に忠実であり続けた人々が常にいたというこ

「しみやしわやそのた
ぐいのもは何一つな
い、聖なる、汚れのな
い、栄光に輝く」花嫁
(エフェソ5:25-27)

とは指摘しておくべきでしょう。この信仰深く忠実な残りの者の存在は旧約聖書に貫かれています。このことは、イスラエルの霊的な共同体はイスラエルの政治的状況と混同されないということを一貫して力強く証明しています。

新約聖書

新約聖書において、神の民という概念は新しくされ、さらに発展しています。バプテスマのヨハネは彼の言葉を聞きに来た人々に、アブラハムの子孫だというだけで神の民としての特権を受けることができると思ってはならないと警告しました。ヨハネは、彼らが罪深い行いから悔い改めるように強く勧め、「良い実を結ばない木はみな、切り倒されて火に投げ込まれる。」(マタイ3:9-10)と警告しました。

パウロは、アブラハムの本当の子孫とはイエス・キリストへの信仰によって応答した者たちで、必ずしも律法を一字一句守ろうとした人々ではないと主張しました(ロマ4:16-18、ガラテヤ3:29)。ペトロはイスラエルについて言われたことを旧約聖書のいろいろな章句を引用してキリスト教会に再適用しました(1ペトロ2:9-10)。これらの聖句や他の箇所からも、新約聖書の記者たちは教会のひな形としてイスラエルを見ていたことは明らかです。歴史全体を通して、神様はご自身のためにひとつの民を召しておられます。それは神様を愛し周囲の国々に神様を証しする準備ができていた民です。旧約聖書におけるイスラエルは一つの「予型」に過ぎません。新約聖書における教会は、その「予型」が体現した「本型」です。

「つまり、クリスチャンであるということは、教会という驚くべき神様の御業から切り離すことのできない存在なのです。」

イエス様が「わたしの教会を建てる」と宣言されたとき、イエス様は個人の救いのためだけに来られたのではなく、神の民の共同体を起こすために来られたということをはっきりさせられました。これは神様が旧約聖書において人々を整えられてきたことを完成するためでした。教会は神様のご計画の中心に立っているのです。このような時代を越えた次元のものは他にはありません。教会を通してこそ、神様の偉大な知恵は「天上の支配と権威に(エフェソ3:9-10)」示され、教会のためにこそ、キリストは来られたのです。キリストは教会のために命を投げ出し、教会が「しみやしわやそのたぐいのものは何一つない、聖なる、汚れのない、栄光に輝く(エフェソ5:25-27)」花嫁のように現れるまで教会に仕え続けてくださるのです。

共同の生活

教会は、スポーツクラブや政治政党のようにどこにでもあるような組織ではないということは、はっきりと心に留めておかなければなりません。前者においては、メンバーたちは共通の関心や目的に基づいて自発的に集まります。一人一人がその組織に属するかを選ぶことができます。しかし、教会は聖霊によって造られたものです。各自はクリスチャンでありながら教会の外にいつづけることは選べません。好むと好まざるに関わらず、キリストを人生にお迎えした時に、その人は聖霊によって教会と呼ばれる世界的な信徒たちの集まりに「加えられる」のです(使徒2:41-47)。

「神は霊である。だから、神を礼拝する者は、霊と真理をもって礼拝しなければならない。」(ヨハネ4:24)

新約聖書は、クリスチャンの共同の生活を強調するためにいろいろな譬えを用いています。例えば、教会は家族に譬えられています(エフェソ2:19、ガラテヤ6:10)。人がその家族の中に生まれることによって家族の一員となるように、神の家族の一員となるということは新しく生まれることです(ヨハネ3:3、5)。同じように、人間の体のたとえもあります(ロマ12:3-5、1コリ12:12-27)。体にはそれぞれ違った機能を持つ多くの部分がありますが、その中を流れる同じ命によって一つです。同じように、クリスチャンは回心後も際立った個性を持ち続けていますが、有機的に結び合わされているのです。クリスチャンはキリストの体にある同じ命を分かち合っているのです。

つまり、クリスチャンであるということは、教会という驚くべき神様の御業から切り離すことのできない存在なのです。家族に対する子どものように、また体に対する肢体のように、全てのクリスチャンは教会との関係において、自分自身を理解しなければなりません。

教会の目的

神様が教会に持つておられる目的とは何でしょうか?なぜ教会は存在することになったのでしょうか?先に進む前に、教会に加わるのは利益のためではないということをもう一度繰り返しておきます。信徒は教会の一部です。次に述べるのは、教会の会員である理由ではなく、信徒の集まりによって達成される教会の目的です。

「あなたがたはそれぞれ、賜物を授かっているのですから、神のさまざまな恵みの善い管理者として、その賜物を生かして互いに仕えなさい。」(1ペトロ 4:10)

神を礼拝すること

モーセがイスラエルの民をエジプトから導き出した後、神様は「幕屋」つまり天幕を建てるようにモーセに指導しました。その建設についてこと細かい指示がなされ、さまざまな祭儀や捧げものも定められました。何年か経ち、イスラエルが約束の地に入りソロモンが王に立てられた後で、幕屋に替わって神殿が建てられました。これらの建物や儀式が定められたことによって、神様はその民に礼拝の意味と、彼らが神様に近づくための基盤を教えました。礼拝は神様によって召された民の中心的な特徴となるものでした。

新約聖書においては、礼拝の意味はさらに入り組んでいきました。サマリアの女性との会話で、イエス様は、神様の礼拝は幕屋にしても神殿にしても地域的なものに限るという考えを退けました。「神は霊である。だから、神を礼拝する者は、霊と真理をもって礼拝しなければならない。」(ヨハネ4:24)。使徒たちも同じように論じました。神殿は具体的な建物として見られるべきものではなく、むしろ生きた共同体なのです。パウロは教会を「組み合わされた建物の全体が成長する、主にある聖なる宮(エフェソ2:21-22参照)」と見ました。同じように、ペトロはクリスチャンを「霊的な家に築き上げられる生ける石(1ペトロ2:5参照)」と言いました。旧約聖書での神殿のあり方は、新約聖書の時代におけるイエス・キリストの教会のあり方なのです。

「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい。」
(マルコ1:15)

教会は神様を礼拝するためにあります。もちろん、新約聖書で礼拝というとき、それはただ日曜日の礼拝に参加するというだけではありません。もしそうだとするならば、その礼拝は旧約聖書の考え方を超えはしないでしょう。一週間を通じて、行うこと全てが神様への礼拝の行為としてされるという意味で、教会は神殿であり、信徒は祭司の共同体です。

互いに仕えること

パウロが教会を人間の体と譬えたことは以前お話ししました。体はそれぞれ違った機能を持つ多くの部分から成りますが、それらは互いに仕えあっています。同じように、キリストの体のメンバーも互いに仕えることを学ばなければなりません(ロマ12:3-8、1コリ12:12-27)。ペトロも同じような考えを持ってこのように書きました。「あなたがたはそれぞれ、賜物を授かっているのですから、神のさまざまな恵みの善い管理者として、その賜物を生かして互いに仕えなさい。」(1ペトロ4:10)

初代教会のクリスチャンたちは互いへの配慮を霊的な面だけに限定しませんでした。彼らは互いの実質的な必要のためにも心を配りました。例えば、信者たちは「皆一つになって、すべての物を共有にし、財産や持ち物を売り、おのおのの必要に応じて、皆がそれを分け合った。(使徒2:44-45)」初期のクリスチャンたちは同じ地域の必要ある人々に留まらず、時には遠くの場所に住んでいる人々のためにも寛容な心を表しました。(使徒11:29-30、ロマ15:26)

教会の使命には「地の塩」「世の光」(マタイ5:13-16)となることも含まれます。

教会は互いを心にかける共同体として存在するものです。イエス様は弟子たちに、互いに愛し合うことによって彼らはイエス様の弟子だと分かると教えられました。「互いに愛し合うならば、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、皆が知るようになる。(ヨハネ13:35)」かつて、背教者ユリアヌス(紀元331-363)がローマ帝国のキリスト教をつぶして異教礼拝を再興しようとしたことがあります。しかし彼はクリスチャンの共同体とユリアヌス自身の周りの人々が極めて対称的であることに強い印象を受けざるを得ませんでした。ユリアヌスはこのような言葉を残しています。「彼らの外国人に対する優しさや死んだ人の墓への思いやり や生活の清さによって、こんなにも無神論(キリスト教のこと) が広まったということになぜ我々は気付かなかったのだろうか？ユダヤ教徒が誰もこの不敬虔なガラリヤ人(クリスチャンのこと)に頼んでもいないのに、彼らの中の貧しい者も我々の中の貧しい者も同じように助けたので、我々が援助する思いに欠けていることが知られてしまうとは恥ずべきことだ。」

神の支配を広める

新約聖書最大のテーマの一つは、神の国です。これはキリストの教えの中心テーマです。キリストは「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい。」(マルコ1:15)、と宣言して公生涯を始められました。彼は悪霊を追い出す奇跡を神の国が確かに来ているしるしだと説明しました(マタイ12:28)。また、弟子たちにこのように祈るように教えられました。「御国が来ますように。御心が行われますように、／天におけるように地の上にも。(マタイ6:10)」彼は弟子たちに、出

「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである」(マタイ18:20)

て行って神の国は間近であることを宣べ伝えるように命じました(マタイ10:7)。

イエス様は神の国をどのように理解していたのでしょうか?何人かの人々は、イエス様がイスラエルの政治的独立を再興することを言っているのだと考えました(使徒1:6)。これは神の民を国家として捉える旧約聖書の概念に逆戻りすることを意味していますから、当てはまりません。

神の国とは、神様の支配が人々の中にあることです。私たちはこれが二つの点で起こると考えることができます。第一に、個人の生活の中にある神の支配です。男性も女性も罪と悪の縄目に縛られています。教会の使命は福音を宣べ伝え、人々の心をキリストのことばに向かわせることです。私たちが目指すものは、彼らが悔い改め、キリストの赦しを受け入れて神様のご支配に従うことです。このような回心の経験はパウロが闇の支配から導き出されて神の国に移されたことに見られます(コロサイ1:13)。

第二の点は社会における神様の支配です。神様に反抗しているのは個人だけではありません。社会全体が神様に背いているのです。教会の使命には「地の塩」「世の光」(マタイ5:13-16)となることも含まれます。塩や光が、周囲に散らされたり放たれたりすることによってのみ機能を果たすことができるように、クリスチャンたちが塩や光の使命を働かせることができるのは、キリスト教信仰の確信と影響を生活のあらゆる状況の

「だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしてください。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け」なさい(マタイ 28:19)

中で持ち続けることによるのです。信仰者たちは神中心の聖書的価値観を社会の全ての面で貫くことを目指すべきです。

おそらくこの時点でこのような質問が出るかもしれません。

「個人的に礼拝することや愛すること、また神様の御国を建てる機能を果たすことはできませんか？」ある限られた範囲においては、答えは「はい」です。しかし、これらの新約聖書の譬え—神殿、人間の体、王国—はクリスチャンの目的を描き出しているだけではなく、教会の様々な特質と私たちの互いの生命がどのように結合しているかを強く認識させます。神殿や体や王国は沢山の部分からなっていますが、各部分は結合し全体として機能します。同じように、私たちが互いに依り頼み合う姿を具体的に表すことによってのみ、私たちは神様が教会に持っておられる目的を実現することができるのです。

目に見える形となった教会

これまで、普遍的な意味での教会について述べてきました。つまり、時代や地域を越えた、神様によって召しだされた人々の集まりです。これは全ての真実な信徒が繋がっている共同体です。しかし私たちはまだ、より地域的なレベルで教会を考えることができます。つまり、ある地域で定期的に会う信徒たちの集まりです。ある意味で、クリスチャンがいるところにはどこでもキリストを代表する教会があります。彼らがきちんと組織されているかどうか、また大きいか小さいか、という疑問はまた別の問題です。イエス様はこのようなグループに最も簡単な定義をつけました。「二人または三人がわたしの名によって

集まるところには、わたしもその中にいるのである」（マタイ18:20）。

一人のクリスチャンが神の民の一部であるということの意味を理解し始めたしるしの一つは、その人がどこにいてもほかの信徒と自分を同じであると認識しようとするときです。学生にとっては、これはキャンパスを意味します。教会という考えを持ったクリスチャン学生はキャンパスで「単独行動」しようと考えないはずです。その人は同じように主を愛し御言葉を尊ぶ学生を探すでしょう。彼らが違う教会の伝統から来ているとしても、その人は主にある一致を目に見える形で表現したいと思うでしょうし、互いに助け合ってキャンパスにおけるキリストの伝道を成就したいと思うでしょう。同じ理由で、その学生が卒業して社会に出ても、その人は仕事場で他のクリスチャンと交わりを持ちたいと思うはずです。

神の民が最も具体的に表されている一つの場所は地域教会です。新約聖書の記者は普遍的な教会のことについて書くべきことが沢山ありましたが、そこで終わってはいません。聖書記者たちは、キリストの体に属することは地域教会に加わることによって表されなければならないということをはっきりさせています。イエス様は「教会」という言葉を2回使っています。マタイ16:18で、この言葉は普遍的な意味で使われています——「わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てる。」しかし、マタイ18:17では、地域的な意味で使われています。ここで、イエス様は罪の指摘を受け入れず、悔い改めることを拒否したクリスチャンについて話しています。この人は教会で教え

られる必要があります。イエス様は、明らかに、全てのクリスチャンは地域教会で教え導かれる必要があることを前提にしています。

同じように、使徒たちも地域教会を彼らの伝道の大切な部分として受け入れていました。使徒言行録において、パウロは福音を宣べ伝え回心者を起こしただけでなく、彼らを教会の組織に入れました(使徒14:23)。多くの箇所、パウロは教会のリーダーたちの資格と義務について指示を与えています。パウロ自身がアンティオキア教会で、リーダーたちの権威に対する服従の模範を定めています。彼は宣教の働きを始めるとき、手を置くことによってその働きを委ねられました(使徒13:3)。後に、彼は教会に海外宣教の結果を報告しています(使徒14:27、18:22)。

地域教会の会員制と関連して考えられるのは洗礼の問題です。イエス様は洗礼を重んじられました。ご自身も洗礼を受けています(マルコ1:9)。イエス様は他の人に洗礼をお授けになりませんでした。弟子たちが洗礼を受けていました(ヨハネ4:2)。最後のメッセージで、イエス様は弟子たちに「だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしてください。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け」なさい(マタイ28:19)と指導しています。これらのことから分かるように、新しい回心者に洗礼を授ける事は、大宣教命令の一部なのです。

使徒言行録における論理的な筋道では、回心に続いて洗礼が授けられました。これは3000人が回心したという場合においても(使徒2:41)、サマリアの信徒に関しても(8:12)、エチオピアの宦官も(8:36)、リディアと彼女の家族も(16:15)、フィリピの看守とその家族も(16:33)、コリントの回心者たちも(18:8)、エフェソの信徒たちも(19:5)そうでした。初代教会において、回心をした人は誰でもその後に洗礼を受けたのは明らかです。クリスチャンたちが洗礼を重んじたのは、それが主の教えの一つだからというだけではなく、洗礼を教会に協力するしるしとして見たからです(1コリント12:13、ガラテヤ3:27)。

今日、多くのクリスチャンたちが洗礼を重んじていないのは悲しいことです。1979年、著者はシンガポールで19の教会と複数の学生のグループで調査をしました。2275の回答者の中で、65.8%だけが洗礼を受けていると答えました。クリスチャンになって5年以上経っているのに、洗礼を受けていないという人がかなりいたのです。この状況は教会の本質と洗礼の意味についての理解が乏しいことを反映しています。

いくつかの問題

この時点で、多くの学生たちがこのような疑問を持つでしょう。「学校のクリスチャンサークルのメンバーであるだけでは不十分なのですか？それが地域教会として活動していることにはなりませんか？」

先に、ある地域の中で共に集められたクリスチャンのグループは普遍教会の代表者であると書きました。したがって、クリスチャンはそのように共に働くことを学ぶべきです。しかし、キャンパス内におけるクリスチャンサークルのようなグループでは、新約聖書における教会のように機能することが充分にはできません。新約聖書における教会の概念に反して働く要素がいくつかあるのです。

第一に、学生のグループは普通限られた対象を念頭においています。学生たちは自分の任務をキャンパス内の学生に伝道し仲間の信仰を建て上げることだと考えています。しかし学生は、教会の特質である洗礼や聖餐式、日曜学校の運営など、全ての働きを担っていると意識しているわけではありません。第二に、クリスチャンサークルのメンバーシップは限定的です。それは学生に限られています。教会を際立たせていることの一つは様々な人が集まっているということです。それは人種や性別、年齢、またそのほかの社会的な区別を超えます。キリストにあって、さまざまな社会的なグループの間にある隔ての壁が打ち壊されました(ガラテヤ3:28、エフェソ2:14)。学生のグループではこのようなことはありません。第三の理由は、学生グループは常にメンバーが替わるということです。学生はたいてい3年あるいは4年キャンパスに留まり、去っていかなくてはなりません。新しいメンバーがクリスチャンサークルに入り、新しいリーダーが引き継いでいきます。そのような流動的な共同体は永続性のある教会として機能する事はできません。

学生の中には、教会員になることへの親の反対という第二の問題に直面する場合があります。以前取り上げた1979年の調査では、回答者の60%が回心したときに家族の反対を受けたということが分かりました。その反対の内容は、「両親が反対する」ということから「クリスチャンになると家を追い出される」ということまで幅がありました。そのような状況にあって、教会員の制度が問題になるという事は驚くに当たりません。ノンクリスチャンの両親の目から見たら、クリスチャンになるということは洗礼を受け教会員になるということが最も分かりやすい基準です。親たちはキャンパスで持たれるクリスチャンサークルのミーティングに行くよりも教会の集会に出席することの方に強く反対するでしょう。

このような状況に学生たちはどのように応えたらよいのでしょうか？両親に反抗して洗礼を受けると固執するべきでしょうか？静かに教会の集会に出席するべきでしょうか？あるいは両親の願いに服従するべきでしょうか？簡単には答えを出せないことは明らかです。このような困難に直面した学生は、より成熟したクリスチャン—例えば学校の講師や主事や牧師に相談することが助けになるでしょう。

以上のことを考えると、学生たちはクリスチャンになることの意味をよく理解していることが重要だと言えます。私たちは多くの人々が福音をやわらげようとする時代に生きています。

「クリスチャンになる事は簡単です。ただ信じましょう！」このように説得する人達があります。しかしイエス様は回心者を得るためにご自身の傷を決して隠されませんでした。そこには常に考えうる犠牲と支払われるべき代価があります。イエス様は

従う人々にこのように警告されました。「わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしくない。わたしよりも息子や娘を愛する者も、わたしにふさわしくない。また、自分の十字架を担ってわたしに従わない者は、わたしにふさわしくない」(マタイ10:37-38)。

学生たちから聞く第三のよくある質問は「どの教会に行くべきでしょうか?」というものです。新しく回心した学生や最近信仰を新たにした人達は、教会や教派が沢山あることにたびたび混乱します。彼らは「間違った」教会に行ってしまうことを恐れるのです。また、健全な聖書の教育が欠けていることや想像力に欠けるリーダーたちが新しいアイディアに反対すること、権威主義や強い教派的な教えなど彼らの教会内にある問題に失望してしまう学生もいるでしょう。このような学生たちは教会を離れるべきでしょうか?

進学のために地元を離れなければならない学生たちは特殊な問題に直面します。彼らはその教会が地元の教会とは異なる礼拝のスタイルや教会運営をしていることに違和感を持つかもしれません。このような状況の中では地域教会からは距離を置き、クリスチャンサークルを教会の代わりとして見たくなるでしょう。

もちろん、「どの教会に行けばよいでしょうか?」という質問に対するきれいな答えはないでしょう。状況は非常に様々です。しかし困惑しながらも解決を見つけようと格闘している場

合は、以下のようなポイントを心にとめておくに役に立つでしょう。

- a. 教会の聖書的な教えを正しく理解しているのなら、礼拝の形式や教会運営の些細な違いはその教会に加わるにあたって打ち勝ちがたい障壁とはならないでしょう。大切な事は主への愛を共有していることであり信仰の基礎的なところで合意していることです。他の部分に関しては他の教会の伝統を尊重していただく姿勢が求められています。
- b. 新しい回心者や最近信仰を新たにした学生たちは神様の御言葉の基礎知識を多く必要としています。そのような場合は礼拝や日曜学校で健全に聖書が教えられている教会を選ぶべきです。
- c. 社会人や年上の学生などから構成されているグループがあることで、教会生活のほかの領域で欠けているところを補うことができます。
- d. 教会にある課題は本当に打ち勝ちがたいものでしょうか？時に、成熟した学生たちが、教会生活に内側から良い影響を与えるためにあえて課題のある教会に留まることがあります。しかしながら、長く続いた姿勢や行われてきた事が変わるには時間がかかるので、彼らはよく機転を利かせ忍耐を働かせなければなりません。

奉仕の領域

学生が地域教会に加わるべきであることを認識するだけでは充分ではありません。彼らは教会のいのちに役に立つ貢献がで

きることを良く知る必要もあります。言い換えると、彼らは受身のメンバーであることで満足してはいけないということです。解剖学者は以前、人間の体にはたくさんの「痕跡」(あるいは役に立たない)器官があると信じていました。進化論では、これらは機能しない器官の残りか祖先が持っていた形状の組織と言われています。しかし今日、人間の体がより良く理解され、痕跡器官は数にして5、6個に減らされました。さらに研究が進めば、これらの5、6個残っている細胞もリストから消えるかもしれません。全てのクリスチャンは、若い人も老いた人も、キリストの体—教会—には「痕跡」メンバーはいないということを知っておく必要があります。全てのクリスチャンが機能を持っているのです。

学生たちが教会のいのちのために貢献できる領域はどのようなものがあるでしょうか？以下を考えてみてください。

- a. 教会学校の教師や青年会の手伝い。ここでの困難は特に男性にあります。日曜学校では男性の教師が足りないことがよくあります。おそらくその理由は高校を卒業しても教会に残る男性が少ないためでしょう。
- b. 中高生の相談相手をする。ある意味で、これは上の項目に関連しています。ちょうど自分自身が思春期の葛藤を通過してきたばかりなので、学生たちは思春期の中にある若い友達の気持ちをより良く理解することができるでしょう。
- c. 文書に関する奉仕。学生たちは教会の会報に記事を書いたり、読んで役に立った本を推薦したり、他の人に本を貸したりすることができるでしょう。書店と適切な手配をして本屋を開

くこともできるかもしれません。良い本を読む事は若い人の生涯に長く続く影響を与えます。

d. キャンパスライフの中で、学生たちは主の働きをする経験を得ていきます。例えば、聖書研究グループを導いたり、信仰を分かち合ったり、その学期のプログラムを計画したりなどです。これらの経験は教会の他の人達にも分かち合うことができます。

e. 信仰とは直接関係がなくても、学校での勉強を役立てることが出来ます。会計学を学んでいる学生は教会会計を合理化する手助けをすることができますし、教育を専門にする人は日曜学校の教育を良くする手助けをすることができます。

f. 学生たちはキャンパスライフについての事柄を分かち合うことができますし、週の半ばに持たれる教会の祈祷会で証しをすることもできます。このようにして、周りの人達は学生をキャンパスにおける教会の「宣教師」として見て励まされるでしょう。出身地から離れたところで学んでいる学生たちは定期的に手紙を出して自分の活動を教会のリーダーたちに報告すると良いでしょう。

以上のリストの他にも、学生が教会のためにできることはありますが、時間の拘束があることを覚えておくことは大切です。学生たちはいろいろな教会活動の責任とキャンパスでの証し、学び、そして家庭生活の間でよくバランスを取らなければなりません。状況は様々でしょう。奉仕者が足りない教会では、学生たちが教会の奉仕に拘束されることは確かでしょう。しかし学内活動でリーダー的な立場を取りたいと願う学生はま

ず優先順位を注意深く考えなければなりません。少なくともある一定期間は、願うほど多くのことを教会でできないかもしれません。彼らの教会のリーダーたちが理解のある方々で、キャンパスにある極めて大きな可能性を見ることで励ましを受けることができることを願うばかりです。学生たちはその場所において教会の宣教師代表なのです。

学生たちと教会の関係で最も大切な要素は真実な謙遜の精神です。この点はいくら強調しても強調しすぎる事はないでしょう。厚かましく、自信過剰で、全てを知ったようなつもりでいる学生たちが教会にやってきてあらゆるものをひっくり返そうとしてしまうのを見ることほど苦々しく、キリストの姿から離れているものはありません。先に、教会内部の問題に失望してしまった学生のことを取り上げたように、教会には常に課題があり、改善すべき点がいつもあります。教会には、様々な人がいるという特徴があるので、結果的に教会の関心が向くところや応えるべき必要が多岐にわたるということを理解する必要があります。教会を「改善」するために提案することが時として他の人々には「有害」なこととして受け取られることもあります。ですから、私たちは他の人々の態度を理解するために多く忍耐し、どのように提案をするかということにも十分に機転を利かせる必要があります。私たちが提案したことが検討され、結果的に取り下げられるときには、私たちは権威への服従を学ぶ、より広い心を持つ必要があります。

私たちの教会を超えた視点

高等教育は、学生たちの視野を広げます。様々な教会の背景を持って学生たちが集まるクリスチャンサークルの構成は、多様な教会の状況があることに目を開かせてくれます。ですから、殆どの学生が自分の地域教会を越えた主の働きに更なる関心を持つようになるのは自然なことです。これは、彼らが自分たちは国や地域よりも広い神様の体の一部なのだと認識し始めるということの意味しているので健全なことです。

学生たちで時々会って、自分たちの地域の教会が直面している問題や課題について共に考え、それらの必要を満たす可能なステップを一つ一つ挙げてみると良いでしょう。そのような学びのグループは大きいものもあれば小さいものもあるでしょう。時々、卒業生や主事や共感してくれる教会のリーダーたちもこのような話し合いに参加するように招くのも良いでしょう。熟考すべきポイントは以下のようなものです。

- a. その国や地域の教会は成長していますか？もし成長していないとすれば、それはなぜでしょうか？その地域で誰が福音に反対しているか知っていますか？どのようにしたら彼らに福音を届けることができるでしょうか？卒業生たちは地方の教会のことを考えているでしょうか？

b. 私たちの教会の神学的な傾向はどのようなものでしょうか？聖書的に健全な神学的講義を十分に受けているのでしょうか？牧師たちは、聖書的な原理を分かりやすく現代の生活に関連させた牧会を講壇からしているのでしょうか？どのようにしたらこれらの牧会に関する事柄をより多くの学生や卒業生が考えるように励ましていくことができるのでしょうか？彼らの訓練のためにどのような所に派遣することができるのでしょうか？どのようにして彼らを支援することができるのでしょうか？

c. 私たちの国には良い信仰書が充分にあるのでしょうか？私たちの国の人々が理解できる言葉で書かれているのでしょうか？それらは地域的な事柄を取り扱っているのでしょうか？学生や卒業生たちはこの領域にどのように貢献できるのでしょうか？

d. 私たちの教会は新しい奉仕の領域を開拓しているのでしょうか？それともクリスチャンの「霊的な」必要を満たしているのみでしょうか？最近の社会的な課題はどうでしょうか？どのようにしたら私たちは地域社会に効果的な奉仕をすることができるのでしょうか？

e. 私たちの国には宣教師への関心がありますか？私たちの教会は他の土地でクリスチャンの働きを開拓する働き人を送っていますか？このことに対する関心を他の人と分かち合うために

どのようなことができるでしょうか？私たち自身は主によって遣わしていただきたいという思いがありますか？

以上に挙げた課題の多くは何年もかかるというのは事実ですが、それらを解決するためのスタート地点は学生時代にあるのです。学生たちはこのような課題についてよく考え始めなければなりません。このことにおいてとても励まされる例は1870年代の日本で起こった「三大バンド」です。プロテスタント信仰が日本に入ってきたばかりの頃、横浜や熊本、札幌で学生たちが回心しました。彼らの多くは自分たちの回心を真剣に受け止める、強い精神を持った侍階級に属していました。例えば、1876年1月30日、熊本バンドに属する35人の学生たちは浜岡の丘を登り、イエス・キリストに対する忠誠を厳粛に誓い、主のためにこの国を勝ち取ると誓ったのです。これらの学生たちは教会のいのちに大きな貢献をすることができる信じ、それに従って自らを捧げました。彼らは国の権威からの強い圧力に直面しました。しかし、後に多くのキリスト教の開拓者や教育者、社会改革者や教会の人々が生み出されたのは、これらの三大バンドからでした。1872年には、日本には受洗したプロテスタント信者は10人しかいませんでしたが、1888年までにプロテスタント教会は25000人の教会員を持つまでに成長しました。続く年月に軍国主義が台頭しなければ、キリスト教は日本でどれだけ成長したことでしょうか。私たちはこれら日本の学生から学ぶことができるでしょう。

教会は神様の計画の中心に立っています。教会は、旧約聖書において、イスラエル共同体によって前もって示されています。教会は形あるものの中で永遠に続く唯一の営みです。神様の救いの恵みが全ての人類に知れ渡るのは、教会を通してです。学生たちはこの神様の計画の中に自分も加えられていることを学ばなければなりません。彼らは教会における自分の場所を認識し、どのようにして神様のために自分の人生を生きたいかを自らに問いかける必要があるのです。

「…つまり、クリスチャンであるということは、教会という驚くべき神の御業から切り離すことのできない存在なのです。家族に対する子どものように、また体に対する肢体のように、全てのクリスチャンは教会との関係において、自分自身を理解しなければなりません。」

参考文献

『新キリスト教大辞典』いのちのことば社出版部編（いのちのことば社、1991年）

『新キリスト教大辞典』いのちのことば社出版部編（いのちのことば社、1991年）

E.E.ケアンズ『基督教全史』（いのちのことば社、1957年）

『学生と教会』

発行日 2016年12月25日
発行 宗教法人 キリスト者学生会
東京都千代田区神田駿河台2-1
Tel 03-3494-6916
mail office@kgkjapan.net
